

2013 Vol.3

GLOCAL



- グローバル人材と大学、大学院教育
～中堅中小企業の国際経営の観点から～ ————— 舩山誠一
- 『高齢者と中部大生の連携で、
高蔵寺ニュータウンに活力を吹き込む！』 ————— 齋藤宏保
- 大学は、地域コミュニティと信頼関係をつくれるか？
～高蔵寺ニュータウン・シンポジウムを終えて～ ————— 羽後静子
- シンポジウム「ことばと心理」
目撃者証言-ことばに歪められた記憶- ————— 水野りか
- だますことば、だまされる心
—社会心理学からみた「振り込め詐欺」のしくみ— — 高比良美詠子
- 気持ちの理解の芽生えを映す子どもの『ウソ』 — 佐藤友美
- 経済的困難世帯の子どもを
対象とした学習支援への取り組み ————— 吉住隆弘

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。

開かれた大学院をめざすシンポジウム

中部大学国際人間学研究科は、2011年度から専攻連携シンポジウムと地域連携シンポジウムを年間で2～4回、開催するようになりました。これまでに9回開催し、2013年度中に、さらに2回開催する予定です。大学院で教育・研究に携わる教員は、学内では院生を対象に講義を行ったりゼミを開講したりしています。また学外では、共同研究に参加したり学会で研究発表を行ったりしています。本研究科主催のシンポジウムは、そうした知的活動をさらに広げるために、専攻分野の違いを超え、また大学と地域との間の垣根を超え、開かれた大学院をめざして行っています。

大学や大学院はもともと、世の中のことすべてについて理解を深め、平和で豊かな世界をつくるために、教育・研究の側面から社会に対して貢献する役割を担っていると思います。大学院には組織として専攻分野の枠組みがありますが、現実世界はそのような枠とは関係なく存在しています。現実世界の一部を切り取り、それに関わる共通のテーマをめぐる専攻分野の異なる教員が開かれた場で意見を交わすのは、きわめて貴重かつ刺激的な活動です。実際、普段は身近なところにながら専門的意見を交わすことが意外に少ない同僚の学問的見解をシンポジウムの場で聞くのは、新鮮な体験です。

地域連携シンポジウムでは、中部大学のある愛知県春日井市とその周辺の地域を対象に、地元と関わりの深いテーマを取り上げて議論してきました。第1回目のシンポジウムでは、中山道の下街道が春日井市内を通過していたこと、また国鉄中央線がこれと並行して建設されたことから、交通の歴史と地域の関わりについて意見を交わしました。地元の歴史に詳しい郷土史家と本学教員との間の学問的交流は、まさしく地域連携にふさわしいものでした。このシンポジウムをきっかけに、「尾張地方の文化の継承」「戦国期の尾張と春日井」「高蔵寺ニュータウンの持続的まちづくり」などに関するシンポジウムを開きました。

地域連携の「地域」には、地球上の特定の場所という意味のほかに、人々が普通に暮らしている生活の場所や空間という意味があります。そのような地域で生じている現象や問題は、一見、個別特殊的に見えますが、実際には一般的要因によって科学的に説明できることが少なくありません。たとえば「ことばと心理」をテーマに行ったシンポジウムでは、

普段あまり気に留めない人間行動の裏側に潜む「心模様の科学的メカニズム」について説明がなされました。説得力のある説明に、参加者の多くは得心した様子でした。別のシンポジウム、「グローバル人材の教育と企業」では、たとえ言語、文化、歴史が違っていても、根本的に人間は理解し合えるということが述べられました。これを聞き、異文化理解の能力を高めて海外でも活躍できる人材を育成する大学院の教育的責任の重さをあらためて痛感した次第です。

1回のシンポジウムを開催するには、テーマの選定、講演者への依頼、会場の確保、広報・宣伝など、実に多くの準備が必要です。この間、報告する当の教員はもとより、裏方で支援する他の教員・職員それに院生など、多くの人々の努力や協力が不可欠です。通常の教育・研究活動とは別の活動であるだけに、協力を求める方としてもいささか気が引ける面があるのは、正直、たしかです。しかし、こうした機会を通して地元の方々をはじめ大学内外の人々と懇意になり、その結果、学問研究をさらに広げていける可能性が高まるように思われます。とりわけ院生にとっては、自らの研究のあり方や研究方法を見なおしたりテーマを広げたりするのに、シンポジウムと関わることに役に立っているように思われます。市役所、商工会議所、各種NPOなど、これまで大学とはあまり関わりのなかった組織や人々とのつながりも、シンポジウム開催の成果のひとつだと思います。

大学・大学院は、世の中の動きより少しだけ先に出て、これからの社会のあり方を考える役割を担っています。世界がどのような方向に向けて変わっていくのか、また変わっていくべきか、多方面から論じあう機会を提供する場でもあります。地球的規模で変化していく現象から目を離すことはできませんが、同時にまた、身近なところで起こっている日常的現象にも目を向ける必要があります。グローバルとローカル、まさに小誌のタイトルでもある「GLOCAL」な視点から世の中の動きを見つめる必要があります。本研究科は、大学・大学院に所属する教員や院生による生きた学問研究が、大学内にとどまらず、地球社会や地域社会の中にまで広がっていくように、これからもシンポジウムを開催していきたいと考えています。

2013年10月

林 上 (中部大学国際人間学研究科長)



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻

舩山 誠一 (MASUYAMA Seiichi)

1973年カリフォルニア大学バークレー校ビジネススクール卒業。MBA。
国際経営学の枠組で、日系中堅企業の中国・アジアビジネスの研究を進めている。



グローバル人材と大学、大学院教育 ～中堅中小企業の国際経営の観点から～



国際経営とグローバル人材

企業を中心に「グローバル人材」へのニーズが近年とみに強まっており、この面での大学の役割についての期待・圧力も高まっている。国際経営の観点からこの問題について考えてみたい。

グローバル人材へのニーズがこのように急激に高まってきた背景には、グローバル化の進展に加えて、国内市場の閉塞感と対照的なアジアを中心とする新興国経済の急速な発展がある。このため、日本企業のグローバル化においてアジア諸国への展開が圧倒的に大きなウェイトを占めていることと、これまであまり国際化が行われてこなかった中堅・中小企業にもそれが及んでいるのが、大きな特徴である。

直接投資対象国として、特に、中国、ASEAN諸国に加えて、日本からは少し遠いが、中国と並ぶ大国であるインドも高い成長を続けており、アジアの魅力が高い。日本企業は、日本との経済の一体化が進むアジア諸国の需要を「内需」ととらえて、海外進出を加速させている。経済産業省による調査では、日本企業の2010年度の海外現地法人の国・地域別売上高では、中国が22%、その他アジアが30%と、アジア地域が過半を占めるまでになっている。

大企業の海外進出が進展することによって、中堅・中小企業の国内需要が減少し、売り上げを確保するために自ら海外進出することを

迫られている。同時に、このような過程で系列関係が崩れて、より自律的な経営を迫られており、中堅・中小企業にとってチャンスでもある。これにともない、国内志向が強かった中堅中小企業においても、アジアを中心に海外に駐在したり、国内において海外拠点との調整や輸出、調達を行ったりする、国際的な業務を行う人材が必要になっている。また、観光業や小売業、飲食業などで海外からの観光客に対応する必要も高まっている。職場で外国人の同僚と一緒に働く機会も増える。

このような内外における国際化に企業において対応できる人材、いわゆるグローバル人材には、国内事業に必要な資質に加えてプラスアルファの資質が求められる。国際経営学の視点や、中部圏の中堅・中小企業の中国上海地域におけるインタビュー調査からの知見を基に、筆者は、グローバル人材には、以下のような5つの資質が大切だと考える。即ち、①現地から必要とされるものを持っている人材、②現地への適応能力、③外国語能力、④論理的思考と行動ができる、⑤日本人としてのアイデンティティを確立し、日本人の強みを持っている人材、である。これらの点に関して、以下により詳しく見てみたい。

現地から必要とされるものを持っている人材

国際的な仕事をこなすためには、まずは、

現地の人が持っていない技術や実務能力をしっかりと持って現地に貢献することが必要である。企業による海外への直接投資が成功するためには、投資する企業が現地にはない技術とか経営ノウハウとかの現地企業に対する優位性を持っていることが必要条件である。日本から派遣される人はこのような優位性を体現していなければならない。

また、企業が多国間に分散した子会社を一体として機能させるために、主に本国で形成された企業文化を海外子会社に浸透させて、共通の行動規範とする必要がある。トヨタウェイ、コマツウェイなどの形成努力に見られるように、日本企業もこのことに積極的に取り組み始めている。日本から派遣される人材は、このような企業文化をしっかりと身に着けていることが望ましい。

実際に、日系中堅企業の海外で活躍している人材も、本社で経験を積んで、技術・実務能力、企業文化をしっかりと身に着けた日本国籍か、現地国籍人である。これらの資質は主に企業に入ってから形成されるが、大学教育においても、将来、企業に入って技術・実務能力を磨くための準備となるような教育をすべきだと言える。単に語学とか外国事情に関する知識以前に、基礎的な学力を身に着ける必要があると言えよう。



森松工業(株)上海拠点にて

現地に適應できる能力

国際経営とは、技術とかマーケティング・経営ノウハウとか、企業自らがコントロールできる能力を、現地の政治・経済・文化という、自らがコントロールできない外部環境に対して適應することによって發揮する仕組みとプロセスであると言える。国際経営を成功させるためには、現地市場に受け容れられやすい商品を開発し、現地市場に受け容れられやすい方法で販売し、現地の文化、法律に合ったやり方で人を育て、使わなければならない。

現地の環境に適應するためには、現地の環境をしっかりと学習し、分析することが重要である。かつて米国の代表的なグローバル企業である、グーグルの日本代表を務めた村上憲郎氏は、グローバルに仕事を動かす4つの知識として、①キリスト教の基礎的理解、②仏教の基礎的理解、③西洋哲学の基礎的理解、④アメリカ史の基礎的理解、を挙げている。①、③、④は、これまで世界を支配し、グローバル企業を輩出してきた欧米の企業、人、市場を理解するうえで必要な知識である。重要性を増す中国で働くには、儒教・法家思想、兵法、中国史などの知識が必要となろう。これに対して②は、そこで働く日本人のアイデンティティ確立のための知識として挙げられている。特に、深層となる文化・歴史の学習を強調していることが注目される。

大学・大学院教育に関しては、国際的な政治経済社会文化についての学習が有効であると考えられる。また、あらゆる側面で多様性を尊重する教育が大事である。このような関心を深め、偏見のない姿勢を形成していくうえで、若い時代に海外経験を含めて多様な経験を積むことが役に立つと考えられる。中部

大学の国際関係学部、国際人間学研究所は、このような国際的な知識を教育するとともに、海外フィールドワーク、留学によって、海外体験を促進するような仕組みを持っている。

外国語能力

国際経営において、まず、国際標準語としての英語の重要性が高い。本社と現地子会社間、あるいは第三人を交えたコミュニケーションには、国際標準語としての英語を使うのが効率的である。日本企業の国際経営の大きな問題点として、人材の現地化・第三人化が遅れて、日本人が中心となり、日本語を社内公用語として国際経営を行っていることにあると言われる。これは、欧米企業が人材の現地化・第三人化を進めて、英語を社内公用言語として経営しているのと対照的であるとされる。楽天などによる英語の社内公用語化に見られるように、この面でも日本企業にもようやく大きな動きが見られる。大学・大学院教育に対しても、英語教育を充実させるようにとの企業からのプレッシャーが高まっている。中部大学国際関係学部においても英語教育に注力してきたが、さらなる充実が必要である。

加えて、現地市場に深く入って販売したり、現地の文化の機微に触れたりしながらの人事管理を行うには、やはりローカル言語によるコミュニケーションが必要になる。現地の政治・経済・文化を理解するうえでもローカル言語能力が重要である。中部大学国際関係学部においては、中国語中国関係学科において密度の濃い中国語教育を行うほか、他の幾つかの地域言語の授業を行っている。

論理的思考と行動

宅配便市場を創造して尊敬を集めているヤマト運輸の故小倉昌男氏は、経営者に一番必要な条件は論理的思考だと言った（『小倉昌男の経営学』）。国際経営においてはこれが一段と重要である。経験に基づく知識の集積が少ない国際環境における経営戦略の立案・実施

において必要なだけでなく、異なった文化を持った人材からなる多国籍企業内におけるコミュニケーションにおいて、論理的説明の重要性が高い。同質的な環境の日本においては、言葉による説明をあまりしなくても人は動くが、異文化環境においては言葉による論理的説明なしには人は動かない。

しかし、日本企業は、この面が弱い。同質的な日本国民を従業員として育ててきた日本企業の経営においては、この論理的思考と行動が外国企業に比べて弱く、改善の必要がある。

大学教育は、本来このような論理的な思考を教えるものであると言える。大学院教育は、このレベルを格段に高めるべきものであろう。欧米企業においては、文科系においても大学院卒の人材を多く採用し活用しているが、経験重視の日本企業にはむしろ忌避されてきた。グローバル人材の育成のためには、企業・大学が協力して、論理的思考・行動能力の高い人材を育成していく必要がある。

日本人としてのアイデンティティの確立と日本人の強みの活用

グローバル人材には、以上のような点に加えて、その育ってきた社会とのアイデンティティをしっかりと持ち、その国民の持つ強みを生かせることが必要である。グローバル人材はグローバル人材であるとも言えよう。

これがなければ、国際社会において十分に信用されない。また、国際的な仕事をしてきた日本人は、国際性があまりないように見える日本人の国民性が、意外に役に立つことがあることも指摘している。国際的競争社会で有効な積極性や自己主張は弱い反面、思いやりと気配り、チームワーク、勤勉性、ビジネスコミュニケーション能力などの面では優位性があるとのことである。自らの優位性を自覚して働くことが求められる。

大学・大学院教育に関しては、フィールドワーク、留学などの外国経験が、逆に日本人としての自覚を高めることにつながると言えよう。



Profile

人文学部コミュニケーション学科

齋藤 宏保 (SAITO Hiroyasu)

1970年 慶應義塾大学法学部法律学科卒業・日本放送協会入局

2004年 日本放送協会定年退職・東京農工大学大学院客員教授

2005年 本学教授

『重い遺産』(祥伝社) 『森が危ない』(共著)(日本放送出版協会)

『飲み水が危ない』(共著)(角川書店)



『高齢者と中部大生の連携で、高蔵寺ニュータウンに活力を吹き込む！』



少子高齢化が急速に進む 高蔵寺ニュータウン

少子高齢化が加速、元気のない高蔵寺ニュータウン。いつから元気を失ったのか。

ニュータウンで最初の入居が始まったのが1968年、今から45年前のことである。名古屋のベッドタウンとして、サラリーマンに人気の的だった。しかし人口は、計画の8万1000人に達することなく、1995年に5万2127人をピークに減少し始め、2013年4月には4万5413人と18年間で6714人も減少してしまった。高齢化も急速に進展し、現在は26.13%。その高齢化を上回るスピードで進んでいるのが少子化で、昭和60年に1万5180人いた14歳以下の子どもは、2013年4月1日現在で5548人と約1/3にまで激減してしまっただけである。

子どもたちの元気な声が聞かれなくなった高蔵寺ニュータウン、住民の急速な高齢化に建物の老朽化も合わさってすっかり活力のないまちになってしまった。

こうした中で、7月6日(土) ニュータウンで開かれたのが、国際人間学研究科主催のシンポジウム「高蔵寺ニュータウン～持続的まちづくりへの取り組み～」であった。

元気のないイメージが定着

それにしてもなぜ高蔵寺ニュータウンの魅

力がなくなったのか。

人口が増えなかった要因の一つには、ニュータウン内に鉄道の駅がないことがあげられる。日本3大ニュータウンの東京の多摩ニュータウンにしても大阪の千里ニュータウンにしても、鉄道の駅がニュータウン内に複数作られ、さらにモノレールの駅もある。

もちろん高蔵寺ニュータウンにも鉄道の計画がなかったわけではない。名鉄小牧駅と桃花台ニュータウンを結ぶ新交通システム「桃花台線(ピーチライナー)」が1991年3月に開業、当初の計画ではJR高蔵寺駅まで延伸される計画であった。しかし桃花台ニュータウンの人口の伸び悩みで採算があわず、多額の借金を抱えたまま、2006年10月に廃止となってしまった。公共の足は、名鉄のバスしかなくなってしまったのである。

また丘陵地帯が開発されたため当然坂が多い。入居した頃は高台からの景観を気に入っていた住民も、高齢になるにつれ坂は負担になっていった。実際にニュータウンのショッピングセンター・サンマルシェの標高(東京湾からみた高さ)104mに対し、高森台中学校は159mとかなりの高低差があることが分かる。坂が難儀なのは歩行者にだけではない。冬は凍結すると車の安全走行を妨げ、ガードレールにぶつける車が跡を絶たない。こうして素晴らしい景観を実現した坂も高齢になるにつれ、歩いて疲れる、冬は凍結して走れない、迷惑な坂になっていった。これも

不人気の原因になっているようだ。

そしてニュータウン内の幅の広い道路も暗くて冷たいイメージを形作っているように思う。確かに車社会の論理からすれば車道は広い方が良い。しかし車道が広いということは道路向こうの地区とのコミュニケーションを阻害、賑わいを分断してしまう。住宅地の道路に求められるのは憩いであり、安全であり、安心である。欧米では大都市の中心部や住宅地では、車優先から人間優先のまちづくりが行われている。この車優先の考え方もまちの魅力を無くしている要因に思われる。

では、どうしたら元気を取り戻すことができるのか。そこで私は、中部大生の若い力を投入することによって、まちが少しは元気になるのではないか、そのお手伝いができないかと考えたのである。

高齢者と中部大生との協働のきっかけ

ニュータウンの高齢者と中部大生との連携は、2011年1月、知人からニュータウンで最も活動的な高齢者クラブ「いちよの会」の当時の会長を紹介されたのがきっかけである。

それから2か月後の3月下旬、小生のゼミの3年生9人と高齢者クラブの方々やニュータウンの住民との最初の顔合わせを行い、正式に新学期から、ゼミの授業としてニュータ

ウンの高齢化問題を取り上げることになった。新4年生のゼミの授業には毎回、いちよの会の会長とメンバーの有志の方に出席をお願いし、どのような視点で取り上げたらよいか、ゼミ生と率直に意見交換する形で進めた。これが高齢者と中部大生の実質的な連携の始まりだった。

まず行ったのは、「いちよの会」が活動している高森台地区の住民103人に対するアンケート調査で、5月の大型連休を利用して実施した。回答してくれた方は82人で、その8割は70代・80代の高齢者で、独り暮らしは12人、約7割が高齢世帯だった。

驚いたのは情報機器についての調査結果だった。まず携帯電話は82人中62人が所有、パソコンも回答者の約71%が所有、その内何と85%がインターネットを使うなど、多くの高齢者が最新の情報機器を苦手とせず、利用していたのである。

この調査からは、高齢世帯だけで暮らしている人が多いものの、さびしいと感じているのは全体の約1割に過ぎず、携帯電話やパソコンを使って、それなりに生活を楽しんでいることが分かった。この地区は高学歴の高齢者が多いため、情報社会から取り残されたくないという気持ちが強いのではないかと推測される。

そこで、ゼミの授業の研究テーマとして取り上げることにしたのは、「高齢者が思い思いに楽しく暮らしている姿を映像化すること」、「パソコンを使った電子井戸端会議の実証実験をすること」「学生が高齢者に分かりやすくスマートフォンの使い方を教えるビデオを制作する」の3つであった。

ただビデオ作品を制作するといっても大学外の方々を巻き込むもののため、いい加減なものでは作れない。しかし私は中部大生なら地域の高齢者の期待にきちんと応えられるという、ある種の確信があった。それは何か。NHKを定年退職後、2005年から中部大学で教えるようになって最初に取り組んだのは、全国規模の映像コンクールに入賞することにより学生に自信をつけさせることだった。これは2006年度から2011年度にかけ

て6年連続入賞を果たすことでクリア、次に取り組んだのが外部機関からの受託研究で成果を上げることであった。学内の授業は60点以上で合格だが、外部との連携ではそうはいかない。最低でも100点以上が求められるからである。これに対しても学生は、三重県松坂市教育委員会や名古屋市上下水道局、NEXCO中日本から研究委託されたプロモーションビデオの制作を次々にこなし、外部からの期待に応えた。学生たちの頑張りをみて、今回の取り組みにも学生たちは必ずや期待に応えてくれると思ったのである。

こうして中部大生が高齢者と連携して制作したビデオ作品は、ニュータウン内の高齢者を大いに元気づけた。その一部はYOUTUBEでも紹介されている。

高齢者との連携が、 NPO法人や地域への連携に発展

翌年の2012年度、4年のゼミで取り組んだ研究課題は、ニュータウンを含む春日井市全体の活性化策を提案するビデオ作品の制作であった。

同時に3年生と4年生のゼミ生が中心となり、NPO法人まちのエキスパネットが主催するニュータウンの夏まつり「高蔵寺きてみん祭」と秋のイベント「高蔵寺フォークジャンボリー」の活動を支援することにしたのである。

これには、3年と4年生のゼミ生が中心となって大学のチャレンジサイトとして取り組んだ。20人のゼミ生を含め、総勢中部大生約30人が、会場や舞台の設営から司会・進行のアシスタント、撮影記録、後片付けなどの手助けをしたのである。またイベントの手助けだけでなく、「元気いっぱい!」と書かれた自前のテントも出展、制作した映像作品を上映するとともに、ゼミ生が試作したサボテン料理（餃子・杏仁豆腐のたれ・サボテンゼリー）を試食してもらった。

特に夏祭りでは、猛暑の中で、「助っ人隊」と書かれたお揃いのTシャツを着た中部大生がきびきびと動き回る姿は、お祭りに元気を

与え、清々しい印象を与えた。またゼミ生が試作したサボテン料理はわずか1時間ですべてさばけてしまうほどの人気だった。

2013年度からは、春日井市と小牧市の約7万世帯にTV番組を提供している中部ケーブルネットワーク（CCNet KCTV局）に15分間の「中部大学アワー」の枠が設けられ、毎日朝昼夕の3回、中部大生が制作した番組が放送されている。その第一回の4月と第二回の5月の放送は、中部大生と高齢者の交流から生まれた番組だった。ちなみに4月は、ニュータウンに住む母娘が、北京オリンピックのシンクロナイズド選手になるまでを描いたドキュメンタリー作品、5月は、国鉄中央線時代のトンネル・愛岐トンネル群保存再生活動を取り上げたものである。

こうして高齢者と学生との連携の成果は、ケーブルテレビを通して、隣の小牧市へも広がりをみせつつある。

足慣らしの時代が終わり、 いよいよこれからが本番!

こうした活動を踏まえて私がシンポジウムで強調したのは、「中部大生と高齢者が本気になって向き合えば、お互いの心が通じ、それが具体的な動きにつながり、道が拓ける、もう議論するときは終わった、課題は分かった、課題を乗り越えるために、とにかく実行するしかない」ということであった。

そしてシンポジウムの後、林上教授から「ニュータウンという名前からはもうそろそろ卒業し、グリーンシティかグリーンタウンの名称で、医療、介護、教育、文化、居住などに関する研究開発拠点、モデル実践拠点、創造拠点としてギアチェンジをしていくべきだ。中部大学はその一翼を担うチャンスがある。守る、維持するから創る方向への転換である。」というメッセージをいただいた。

まさにその通りだと思う。あてになる人材の育成を掲げる中部大学、地域社会からの熱い期待にどう応えるのか。

まさに今、その対応の真価が問われているのである。



Profile

中部大学大学院 国際人間学研究科教授 国際政治学 人間の安全保障 国際ジェンダー論

羽後 静子 (HANOCHI Seiko)

カナダ・ヨーク大学大学院政治学研究科博士課程修了。ヨーク大学国際安全保障研究センター研究員を経て、2004年より中部大学で教鞭をとる。2007年に中部大学を事務局として国連大学中部ESD地域拠点に認定されるにあたり、中部地域の市民ネットワーク発足に関わり、高蔵寺や勝川駅前商店街でESD実践活動を行う。



大学は、地域コミュニティと信頼関係をつくれるか？

～高蔵寺ニュータウン・シンポジウムを終えて～



新しい公共圏の登場

ポランニーのいうように、伝統社会においては、交換、再分配、互酬性に基礎に置いた相互扶助的な関係が共同体の中心にあった。しかし、18世紀以降の産業化と工業化の展開においては、こうした社会の秩序は、一方で「私」領域としての市場経済が飛躍的に拡大し、他方では市場に対して様々な介入を行う「公」の領域としての政府部門が展開してきた。さらに日本では、明治国家が富国強兵を掲げ、戦前戦後を通じて高度経済成長期までは、総力戦体制のもとでの軍事化と工業化の中で、「公」「共」「私」のすべてが国家へと収斂していった。しかしながら、先進西欧諸国では日本を含めて、戦後の国家を単位とする高度成長期が終わると、国家レベルではなく地域コミュニティのレベルで、以上のような「私」と「公」とも異なるいわば「新しい公共」の領域が展開することになる（下の図を参照）。「公―共―私」をめぐる構造の歴史の変容は、以下のように一般化される。

「公」……国連 国家（政府）、地方自治体。

「（新しい）公」共」……地域コミュニティを支えるボランティア、NGO/NPO、コモンズ、相互補助、コミュニティ。

「私」……企業（多国籍企業、国内企業）、特に地域コミュニティの固有な中小企業、市場。

その中で、「新しい公共」は、伝統的な共

同体とは異なり、自立的な個人をベースとした自発的かつ開かれた性格の共同体を支える社会資本として磨き上げられる必要がでてきているのである。この領域は一方で市民的公共性の担い手として、それまで政府が担っていた役割をNPOやNGOが担っていく。他方では、市場経済の主体であった企業もまた、「営利と非営利の連続化」という流れや企業の社会的責任（CSR）などの文脈から部分的には、「新しい公共」の領域ともクロスオーバーしていくこととなるのである。さらに以下に述べるように、新しい公共の担い手としての大学の役割が問われるようになった。

ポスト産業社会と大学

高度経済成長期を終えたポスト産業社会ないし定常化の時代においては、伝統知の再発見と再評価、新しい社会の知識や文化の創造が社会や人々の関心事となってきている。環境、歴史を踏まえたローカルなレベルでの知、福祉、環境、まちづくりに関する市民活動が活発になるにつれ、「コミュニティの中心」としての大学の役割が重要になってくる。筆者が関わっている勝川駅前通り商店街では、月1回中部大学の教員、学生、市民で弘法塾を行っているが、大学と近隣の商店街が様々なかたちでコラボレーションするなど、まち全体を一つの大学ないし、キャンパスとして講師を招き、それをコミュニティにおける出

会いの場として活用する試みもあり、大学という場を「コミュニティの中心」あるいは地域の拠点として地域住民の連携や世代間交流の拠点として新しい意義を担っていくことになる。国連もまた、コミュニティを中心にした持続可能な地域社会を推進するため、持続可能な開発のための教育（ESD）を提唱しているが、2007年10月中部大学は、国連大学により認定された世界で36番目のESD地域拠点大学となった。中部地域の12の河川を中心に、愛知、三重、岐阜を伊勢・三河湾生命流域圏といい、生態系のみならず政治経済、文化的に学際的にとらえるため、特に「生命流域圏」というコンセプトを発展させてきた。以下では、「生命」の観点からコミュニティと大学の可能性を考えてみたい。

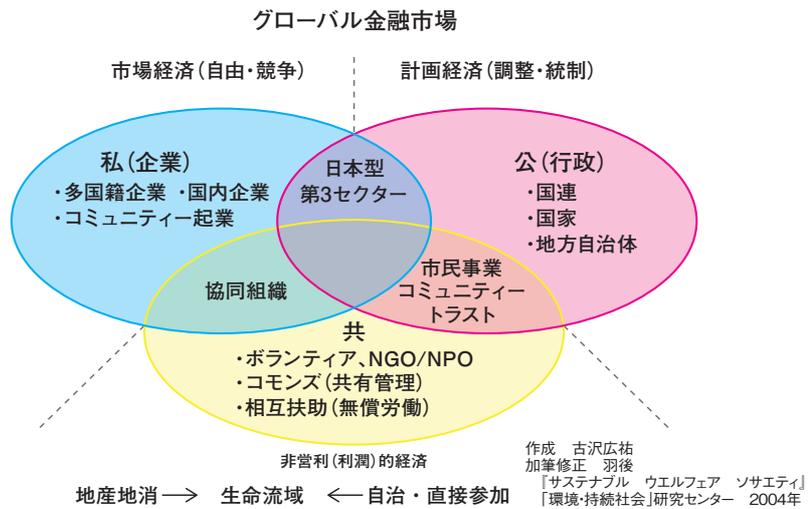
ケアするコミュニティと大学

最近の生命科学においては、遺伝情報と脳情報という2つの「情報」というキーワードから生命をさらに深く説明しようとする研究が発展してきているが、今後は、情報概念の中心が遺伝情報からむしろ脳情報へシフトしていく可能性があり、そうすると脳情報から生命を読み説く作業として、その脳が置かれている社会環境、つまりコミュニティの存在やあり方が大きな役割を果たしていることが科学的にも証明されることになる。認知症の高齢者のケアにおける地域やコミュニティの

役割がさらに注目されることになるようだ。

高齢者をケアする場所として、病院のような専門的な医療施設と補完的な役割として地域コミュニティがあるのではなく、もっと積極的な意味で、病院と対等かそれ以上の役割をコミュニティが担うといい、その研究領域は「ケアの科学」(広井)と呼ばれている。確かに、高齢者ケアといっても、外部から新しく移住してきた住民の春日井市東部の高蔵寺ニュータウン地域と歴史的に人間関係の濃密な春日井市西部の勝川商店街地域とでは、高齢者ケアのあり方は違って来るにちがいない。つまり、高齢者福祉のありかたを、場所を超越して普遍的にとらえるのではなく地理的、空間的な視点を導入することが重要になってくる。

経済成長期の国家社会においては、世界は単線的な市場経済の時間座標のもとで地域は位置づけられてきたが、成熟化、定常化の時代に置いては、「成長」を尺度とする座標軸ではなく、地域の風土の多様性が再認識され、再評価されることになる。そこでは福祉を土地の歴史や風土的特性、人と人との関係の質、コミュニティのあり方そのものの中に埋め込む作業が重要になってくるのである。ここでは、高齢者のケアの場所としてのコミュニティとその担い手としてのフィリピン女性⁽³⁾と中部大学の女子学生たちの可能性に注目した



い。中部大学がこれから立ち上げようとしているCOC(地域拠点大学)プロジェクトと高蔵寺ニュータウンのキャンパス化への構想をもとに、現在生命健康学部を中心に高蔵寺の高齢者と中部大生の交流が行われているが、以下の図は女性のライフサイクルの視点から国際関係学部的女子学生たちによる高蔵寺ニュータウンと大学をベースにした女子学生のライフサイクルをモデル化したものである。

仮に女子学生の名前をTさんとする、Tさんは、入学して、大学の協力を得て、高蔵寺ニュータウンで友人とルームシェアをする。大学と高蔵寺ニュータウンで開催される講座で学び、活動する。ニュータウンでボラ

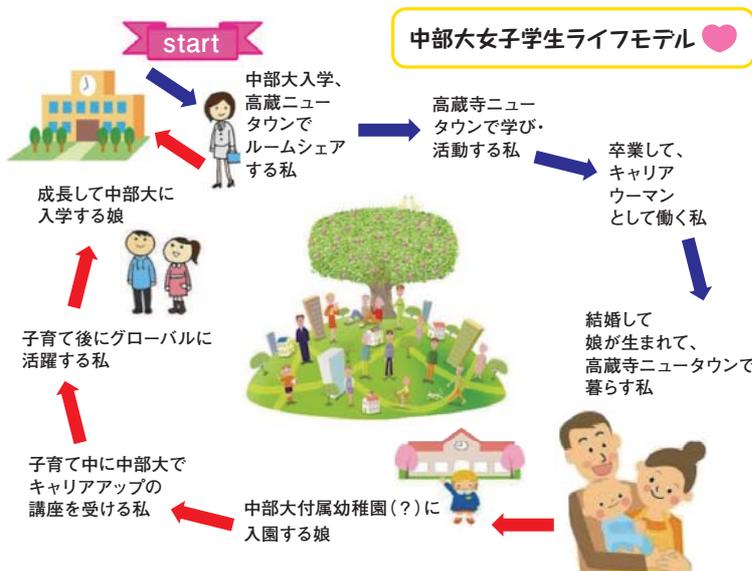
ンティア・まちづくり実践活動の経験を買われ、地元企業へ就職する。

数年後に職場結婚した彼女は、学生時代第2の故郷のように愛着を持ち、高齢者との人脈をつかった高蔵寺ニュータウンに新居を構える。その頃には、仮説だが、現代教育学部が大学近辺に開設しているかもしれない中部大学付属幼稚園(または保育園)にこどもを預けて働き続ける、あるいは、子育てのために最初の職場を辞めた場合でも子育て中に中部大学のエクステンションセンターあたりが企画してくれるであろうキャリアアップ講座で様々な資格講座を受け、子育て後は、再びキャリアウーマンとして働き始める。大きくなった子供は、めでたく(!?)中部大学に入学、親子二代で中部大学でお世話になり、かつ中部大学を盛り立てていくというシナリオである。今後大学とコミュニティが学生支援の視点から実質な補完関係を構築できる、コミュニティの核となることを願っている。

参考文献

- 広井良典(2011)『創造的福祉社会―「成長」後の社会構想と人間・地域・価値』ちくま新書
- 広井良典(2009)『コミュニティを問いなおすーつながら・都市・日本社会の未来』ちくま新書

(注) 紙幅の都合で、ここでは取り上げていないが、筆者が関わっているフィリピン女性たちの助け合いネットワーク(SALVIFIC)は、高蔵寺ニュータウンを中心に高齢者との交流を行っている。



2013年度チャレンジサイトプロジェクト 『地球がキャンパス・国際女子力up!のための教材づくり』より抜粋



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻教授

水野りか (MIZUNO Rika)

名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。専門は認知心理学・認知科学。『知識形成と自然言語処理における文脈の影響の認知科学的検討』で博士(工学)(名古屋大学)を、『分散効果の生起過程の解明と効果的な分散学習スケジュールの実現』で博士(教育心理学)(名古屋大学)を取得。近著は「認知心理学の新展開－言語と記憶」(共著)(ナカニシヤ出版)、近編著は「心理学を学ぼう」(ナカニシヤ出版)。http://psy.isc.chubu.ac.jp/~mizunor/



シンポジウム「ことばと心理」

目撃者証言—ことばに歪められた記憶—



シンポジウム開催趣旨

ことばは人の心を動かす。時にはポジティブに、時にはネガティブに。そのため心理学では様々な角度からことばが人間の心理に及ぼす影響が検討されてきた。その知見には心理学を専門とする方々のみならず、一般の方にも有用な、身近なものが多い。

心理学というと、一般には臨床心理学というイメージを抱かれるが、実は心理学には、心に問題を抱えた人々の治療や適応を目指す臨床心理学だけでなく、一般的な人間の心のメカニズムの理解と応用を目指す実験系や調

査系の心理学があり、後者には認知心理学、学習心理学、知覚心理学、社会心理学、発達心理学など多くの領域がある。

中部大学大学院国際人間学研究科の心理学専攻は多様な領域の教授陣から構成されている。そこで、様々な領域で得られてきたことばと心理に関わる有用な知見を広く一般市民にオムニバス形式でお話しし、様々な知見を知っていただくと同時に、心理学に多様な専門領域があることをお示ししたいと考え、本シンポジウムを企画・開催した。

Glocal Vol.3では、筆者を含め、数名のパネリストの講演の概要を紹介する。

目撃者証言—ことばに歪められた記憶—

はじめに

日本でも、市民が審理に参加する裁判員制度が2009年5月21日に施行された。法律についてほとんど何も知らない一般市民も法に参加することになったわけである。裁判員は、証人や被告人に質問するという権限まで与えられている。目撃者証言は、被告人の処遇を判断する材料の1つとなりうるものだが、人間の記憶に基づく証言は証拠に比べて、客観性や確実性に乏しい場合がある。

認知心理学は人間の情報処理過程を明らかにするための心理学で、人間の認知、すなわち、入力情報の理解の過程を扱い、人間の記憶への諸要因の影響も検討する。目撃者証言は記憶に基づくものであり、何らかの影響下で歪められる可能性がある。そのためアメリカでは、裁判に認知心理学者が関与し、証言の信憑性を認知心理学的観点から吟味するケースも増えてきている。日本ではまだそこまでは至っていないものの、2000年11月には「法と心理学会 (Japanese Society for Law and Psychology)」が設立され、人間の判断、証言、記憶に影響する様々な要因が心理学的観点から検討され始めた。ここで紹介する目撃者証言に関する知見はこれまでの研究で得られた数多くの知見のごく1部に過ぎないが、そのいくつかを紹介することで、目撃者証言



Figure 1. シンポジウムでの研究紹介の様子

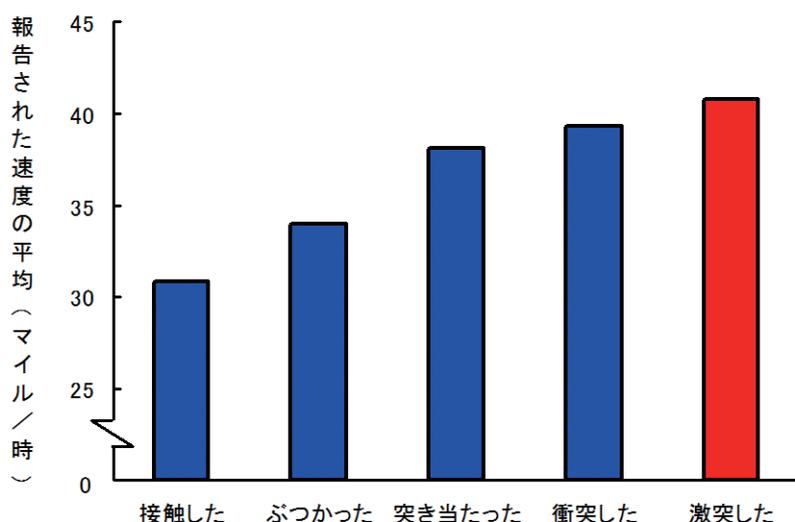


Figure 2. Loftus & Palmer (1974) の実験結果

のもろさや不確実性を多少なりとも伝えることができれば幸いである。

ことば使いに歪められた証言

Loftus & Palmer(1974) は次のような実験を行った。彼らは実験参加者に交通事故のビデオを見せた。そして、何人かの参加者には「2台の車がぶつかった時のスピードは何マイル位だったか」と尋ね、別の参加者には「接触した」、「突き当たった」、「衝突した」、「激突した」と、先の文言の1語だけを置き換えて質問した。各々のことばで質問された参加者の報告した車の速度の平均が、Figure 2である。「接触した」ということばで質問された参加者の報告したスピードに比べて、「激突した」ということばで質問された参加者の報告したスピードが、いかに速かったかがわかる。

またこの実験では、1週間後に同じ参加者に、「あなたはガラスの破片を見ましたか？」という質問がされた。その結果、「ぶつかった」と言われた参加者のうち「いいえ」と答えた者は43名で「はい」と答えたのは7名だったが、「激突した」と言われた参加者では、「いいえ」が34名で「はい」と答えたのが16名と、「はい」と答える割合が高かったのである。

これらの結果は、「質問で用いたことば使用」が目撃者証言に影響しうることを端的に

示している。

質問に歪められた証言

Loftus(1975) は、質問に付加された情報が誤った目撃証言を生んでしまうことを、次のような実験で明らかにした。彼女は学生に交通事故のビデオを見せた後、グループAの人たちには「白いスポーツカーが田舎道を走っていた時のスピードはどのくらいだったか」と尋ね、グループBの人たちには、「白いスポーツカーが田舎道を走って、農家の納屋の前を通り過ぎた時どのくらいスピードを出していたか」と尋ねた。そして1週間後、彼らに「納屋を見たか」と尋ねたところ、「見

た」と答えた人の比率は、Figure 3のようになった。

この結果は、質問に付加された架空の情報が目撃者の記憶を形成し、それが誤った目撃者証言につながりうることを示しているのである。

人間の記憶を歪める要因

目撃者証言は人の記憶に基づく証言である。人間の記憶はそれほど確かなものではない。そして、様々な要因によって歪められる。ここでは、そのうちのいくつかの要因を紹介する。

■注意の限界

人間は、特定の必要な情報にのみ注意を向けることができる。これを選択的注意という。例えば、我々は騒々しいコンサートで音楽よりかなり小さい友達の声を聞き分けることができるが、録音されたテープでは音楽しか聞こえないなどという場合も多い。実際、人間のように選択的に必要な音声だけを処理できる集音マイクを作ることができれば、飛びように売れるに違いない。それほど高度な情報処理を、人間は行っているのである。

その一方、我々が注意できる範囲は極めて限られている。これは注意資源の限界と呼ばれる。選択的注意は、限られた注意資源で大切な情報を効率的に処理するための、高度な

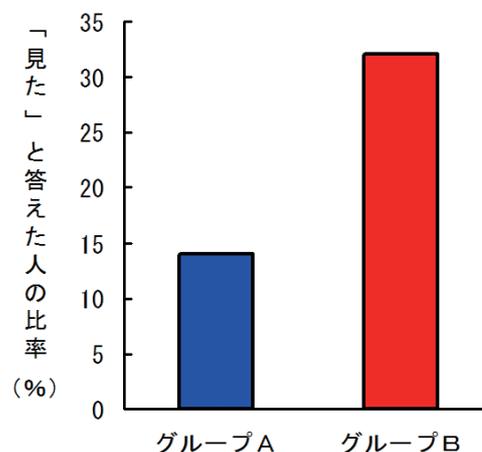


Figure 3. Loftus (1975) の実験結果

認知能力だと言える。

試しに、次の【 】内の文章の赤い文字で書かれた部分だけを声に出して読んで、読んでからすぐこの文章を手で隠してほしい。

【自然環境のゆやくんは破壊はゆうべできるかぎりおくじょうに阻止すべきだとのぼって誰もがまわりのやまやまを考えているながめました。】

赤い文字だけを読むのは、簡単だったはずである。しかし、黒い文字で何が書かれていたか、答えられるであろうか。事実、講義で学生に同じことをやってもらい、直後に「黒い文字では何が書かれていたかわかりますか？」と聞いて内容が答えられた学生はこれまでに一人もいない。黒い文字も目で追ったはずなのである。You Tubeに“Test Your Awareness: Do The Test”という映像が公開されている。これをご覧いただければ、人間の選択的注意の秀逸さをさらによく実感していただけるはずである。

こうした実験結果は、我々が注意を向けていない情報をほとんど処理しないことを示している。したがって、注意して見ていたわけではなくたまたま目撃した犯罪なり交通事故なりの現場の情報を我々が正確に記憶している可能性は、極めて低いと考えざるを得ない。

■情動

Clifford & Hollin(1981) は、男性が暴力行為で女性からハンドバッグをうばうという凶暴なビデオと、男性が女性に道を尋ねるという凶暴でないビデオを参加者に見せた。

そして、その後参加者に、男性の特徴を報告させ、写真識別を行わせた。その結果、凶暴条件の特徴報告や識別の正確度は、非凶暴条件より極めて低いことが明らかとなった。

この結果は、情動的動揺が記憶を妨げること示している。このことから、「怖かったのでよく覚えている」というのは誤解であることがわかる。凶悪犯罪、残忍な犯罪を目撃した際に正確な証言を行うのは、そうでない場合より難しいのである。

■推論と連想

「男は頭から血を流して倒れていた。女の手には花瓶が…」。これを読んだ読者は当然、女性が男性を花瓶で殴り殺したと推論し、理解し、記憶する。しかし、実際はそんなことはどこにも書かれていない。

このように、人間は入力された情報を推論で補完して理解し、記憶する。その推論は無意識である。そのため、記憶に基づく証言が事実なのか推論の結果なのかは、特に時間が経過してしまうと、本人にもわからない。

連想も、事実と異なる記憶、いわゆる虚記憶を生む。例えば、「画面に呈示される単語をできるだけたくさん覚えてください」と伝えた上で、「活字」、「勤務」、「老人」、「国語」、「育児」…と、数多くの単語を見せた上で、「先ほど呈示された単語の中にあつたかなかったかを判断してください」という再認課題を課すと、「文字」、「雇用」、「介護」、「漢字」、「子ども」のように、呈示された単語と意味的に関連の深い単語を誤って「あつた」と答える確率が高くなる。

このことは人間が、呈示された情報と関連

のある情報を連想し、当該情報とともに記憶してしまうことの証拠である。Loftus & Palmer(1974) で紹介した、「激突した」と言われた参加者の方が「ガラスの破片」を見たとき答える確率が高くなったのも、連想の影響である。

おわりに

大切なことは、証言の誤りは意図的、意識的に生じるのではなく、無意識に起こりうるということを認識しておいていただくことである。目撃者は皆、懸命に、誠実に報告する。彼らは、本当にそうだと信じて証言しているのだが、紹介したような様々な心理的要因が無意識のうちに証言を誤謬に導く。

特定の要因が無意識のうちに証言を歪曲させることをあらゆる人に理解してもらうためには、客観的な証拠を提示せねばならない。そうした要因を見出し、客観的証拠を得ることは、認知心理学の使命であり、行動科学である認知心理学の重要な研究の1つなのである。

引用文献

- Clifford, B. R., & Hollin, C. R. (1981). Effect of the type of incident and the number of perpetrators on eyewitness memory. *Journal of Applied Psychology*, **66**, 364-370.
- Loftus, E. F. (1975). Leading questions and the eyewitness report. *Cognitive Psychology*, **7**, 560-572.
- Loftus, E. F., & Palmer, J. C. (1974). Reconstruction of automobile destruction: An example of the interaction between language and memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **13**, 585-589.



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻准教授

高比良美詠子 (TAKAHIRA Mieko)

1999年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得退学。博士（人文科学）（お茶の水女子大学）。専門は社会心理学。著書に『ネガティブ思考と抑うつ』（学文社、単著）、『サイエンス・コミュニケーション』（日本評論社、共著）、『インターネット心理学のフロンティア』（誠信書房、共著）など。takahira@sti.chubu.ac.jp



だますことば、だまされる心 —社会心理学からみた「振り込め詐欺」のしくみ—



心理学が目指していること

心理学は、科学的な方法を用いて人間の「心の法則」を明らかにすることを旨とする人間科学である。そのため科学に分類される他の研究分野と同じく、体系的で普遍的な法則を発見することが大きな目標になっている。また同時に、発見した「心の法則」を利用して、現実場面で生じるさまざまな問題の解決を目指すという目標も重要視されている。

そこで本稿では、10年ほど前から日本で社会問題化している「振り込め詐欺」に焦点を当て、私たちが詐欺に騙されてしまう背景にどのような「心の法則（しくみ）」が関係しているのかについて考察する。

さまざまな詐欺の手口と被害状況

警察庁では、“被害者に電話をかけるなどして対面することなく欺もうし、指定した預貯金口座への振り込みその他の方法により、不特定多数の者から現金等をだまし取る犯罪”を特殊詐欺と総称している。この特殊詐欺の代表例が「振り込め詐欺」であり、オレオレ詐欺、架空請求詐欺、融資保証金詐欺、還付金等詐欺の4種類がここに含まれる（表1）。なお最近では、現金を振り込ませる手口に加え、犯人が現金やキャッシュカードを直接受け取りに来る手交型の手口も増えてきたことから、2013年より「母さん助けて詐

欺」という名称が新たに採用され、従来の「振り込め詐欺」と併用されている。

これらの振り込み詐欺の詳しい手口はマスコミ等でもたびたび報道されており、警察庁のウェブサイトでは、振り込め詐欺の最新情報が随時閲覧可能である。このような地道で幅広い広報活動が功を奏し、振り込め詐欺の認知件数（被害届が出された件数）は、2009年には最盛期である2004年の4分の1程度にまで減少した。しかし、振り込み詐欺の中で最も認知件数が多いオレオレ詐欺は、いまだに年間3000～5000件の被害が報告されている。また、近年では、振り込め詐欺以外の特殊詐欺である、金融商品等取り引き名目の詐欺、ギャンブル必勝情報提供名目の詐欺、異性との交際あっせん名目の詐欺なども急増している。

心の法則からみた騙されるしくみ

それでは、なぜこのような詐欺が横行するのだろうか。社会心理学の立場からみると、騙しの手口は人が普遍的に持つ心の法則を利用したものが多く、犯人が使う言葉は私たちの心の弱みを巧みに突いている。そのため、誰もが被害者になる可能性を持っている。そこで本稿では、振り込め詐欺（特に、オレオレ詐欺）に騙される下地となる普遍的な心の法則として、(1) 自動判断ルート、(2) 社会的動物、(3) 自己中心性バイアスの3種

類を取り上げ説明を行う。

(1) 自動判断ルート

騙しに利用される心の法則の1つ目は「自動判断ルート」である。人が出来事の意味を判断するときの方法は2種類のルートに大別される。一方は熟慮判断ルートであり、こちらでは、できるだけ予断を排した状態で、遭遇した出来事や与えられた情報の意味が注意深く自律的に処理される。もう一方は自動判断ルートであり、こちらでは、これまでの学習や経験によって頭の中に蓄積された知識のデータベースを積極的に利用しながら、遭遇した出来事の意味が即時に効率よく処理される。人がリアルタイムで処理できる情報量には限りがあるため、普段の生活では、より負担が少ない自動判断ルートが利用されやすい。しかし、自動判断ルートは、効率性は高いものの柔軟性に欠けることから、問題が生じたときは熟慮判断ルートに切り替えることで行動の調整が計られる。

これらの2種類のルートを適宜切り替えて用いることで私たちは状況にうまく適応しながら生きているが、犯人は、この普遍的な心の法則を利用することで、自分たちに都合がよい方向に被害者の思考を誘導する。たとえばオレオレ詐欺では、時間的切迫感や、心理的動揺を高めるシナリオを用意して被害者をあわてさせ（「交通事故を起こしてしまった」「早く決断しないと間に合わない」など）、熟慮判断ルートを利用できない状態にする。こ

れは、心に余裕がなくなると熟慮判断ルートをうまく作動できないという私たちの「心の法則」を利用した騙しの手口である。

また、リアリティのある手掛かり情報を被害者に与えることで、自動判断ルートが「本当にあった話だ」と判断するようにミスリードする。たとえば、息子役の犯人が「電車の中で鞆をなくして、その中に会社のお金が入っていた」と被害者に電話をかけ、その後、駅員役、会社の上司役の犯人が次々に電話をかけるなど、被害者がこれまでの知識や体験と照らし合わせたときに、本当らしく思えるようなシナリオを用意する。犯人が名簿などから被害者の個人情報を手に入れていれば、より信憑性の高いシナリオを作成することができる。また、電話の声が息子のものとは異なるなど、明らかにおかしな点があった場合も、「風邪をひいて声が変わんだ」などとあらかじめ理由の説明があると、被害者の注意が電話の声に向きにくくなる。このように、熟慮判断ルートを封じ、自動判断ルートを都合のよい方向に誘導する騙しのテクニックを駆使することで、被害者に犯人が作ったシナリオを信じ込ませることが可能になる。

(2) 社会的動物

騙しに利用される心の法則の2つ目は「社会的動物」である。ヒトという動物は、自分や血縁者の生存確率を高めるために、他者と協力して大規模な社会（群れ）を作って暮らすという方向に進化してきた。そして、社会からの排斥は自らの生存の危機につながるため、人は他者からの排斥を嫌う心の法則を身につけるようになった。また、社会からの排

斥を防ぐために、悪い評判が立たないように配慮しながら行動するようになった。

そこで、オレオレ詐欺ではこの心の法則を利用し、「会社をクビになりそう」「訴訟を起こすと言われている」など、お金を用意しなければ家族全体の評判が落ち、社会から排斥されることを暗示するシナリオを用意する。その結果、被害者は、家族の不名誉が外部に漏れないようにこの問題を秘密裏に解決しなければならぬと感じる。そして誰にも相談することなく、犯人に大金を渡してしまうことが起こりうる。

(3) 自己中心性バイアス

騙しに利用される心の法則の3つ目は「自己中心性バイアス」である。これは、人が、客観的事実が示す以上に、「自分の判断は正確で、物事を自分の力で左右でき、事故や事件に巻き込まれる確率は低い」と楽観的に考えがちな傾向を指す。

なお、このように自分のことだけを特別視する「自己中心性バイアス」は、私たちの社会適応を促す働きを持っている。具体的には、自分の能力や将来に対して明るいい見通しを持つことで心身の健康が保たれ、社会の中で他の人と積極的に関わる気持ちになり、困難にぶつかったときも簡単にあきらめにくくなることが明らかになっている。

しかしその一方で、自己中心性バイアスという心の法則を持っていることが、判断ミスを引き起こす場合もある。警視庁が詐欺の被害に遭った被害者を対象に行った2012年の調査では、回答者の92%が、詐欺被害について「自分は大丈夫だと思っていた」「考

えたこともなかった」と回答し、「騙されるかもしれないと思っていた」人は2%にすぎなかった。振り込め詐欺の話を聞いても、大半の人が自分には関係ないと感じ、必要な注意を怠ることの背景には、自分の力を現実より過大評価するこのような心の法則が影響していると考えられる。

心の法則からみた詐欺への対抗策

以上で紹介した3つの心の法則は、いずれも、社会の中で適応的に生きていくために必要な心のしくみである。振り込め詐欺への対抗策を考える際の難しさは、私たちが社会に適応していくために必要とされる心のしくみが、そのまま私たちを騙すときにも利用されてしまう点にあり、その意味で、被害を完全に防ぐことは難しい。

しかし、犯人が狙ってくる心の法則を理解することで、より効果的な対抗策を立てることは可能であろう。たとえば、私たちが「自動判断ルート」を使いやすいことを利用した騙しの手口については、何かおかしいと感じたら即断せず、熟慮判断ルートに切り替えるくせをつけることである程度防御できる。「社会的動物」であることを利用した騙しの手口については、信用できる相談先をあらかじめ考えておき、重要な判断を行う前に必ず意見を求めることが対抗策になる。「自己中心性バイアス」があることを利用した騙しの手口については、騙されるのは特別な人ではないことをよく認識し、日頃から用心を怠らないことが対抗策になる。

なお、本稿で挙げた以外にも、騙しに利用される心の法則は多数存在する。心理学を学ぶことで、人が持つ心の法則と現実の社会問題との関係を読み解き、社会の中で適応的に生きる上でのヒントを探る試みは、今後も継続して行っていく必要があるだろう。

付記

本稿は、2013年7月に文化フォーラム春日井で行われた、中部大学国際人間学研究科主催・春日井市後援のシンポジウム「ことばと心理」での報告を元に構成されたものである。

表1 警察庁による振り込め詐欺の種類とその内容

オレオレ詐欺	親族を装うなどして電話をかけ、会社における横領金の補填金等の様々な名目で現金が至急必要であるかのように信じ込ませ、動転した被害者に、指定した預貯金口座に現金を振り込ませる詐欺
架空請求詐欺	架空の事実を口実に金品を請求する文書を送付して、指定した預金口座に現金を振り込ませる詐欺
融資保証金詐欺	融資を受けるための保証金の名目で、指定した預貯金口座に現金を振り込ませる詐欺
還付金等詐欺	市区町村の職員等を装い、医療費の還付等に必要な手続を装って現金自動預払機（ATM）を操作させて口座間送金により振り込ませる詐欺



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻
佐藤 友美 (SATO Tomomi)

2012年お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科博士後期課程修了。専門分野は幼児期・児童期の社会性の発達。

satot@isc.chubu.ac.jp



気持ちの理解の芽生えを映す子どもの『ウン』



子どものことばの発達

人はことばをもって生まれてくるわけではなく、発達の過程で獲得されるものである。ことばの獲得により、人は多くのことが可能になる。たとえば、プランを立てて行動するというように自分の行動の制御が可能になったり思考することができるようになる。したがって、ことばがいつ頃どのように獲得されるのかは、発達心理学において重要なトピックであり、多くの研究がなされてきた。

ことば（初語）が出てくるのは9か月頃からである。2歳頃になると語彙が急激に増える語彙爆発が起こる。3歳になる頃には、ことばが豊かになり、ことばによるやりとりも安定したものへとようになっていく。この頃の特徴的なことばの使用に「ウン」が挙げられる。

親が認識する子どもの「ウン」

3歳頃になると、子どもは実際に行ったことのないところに行ったり、できないことをできると言ったりする。このような子どものことばに不安を募らせる親も多い。我が子は純粋だと思っていたのにもかかわらず嘘をつくなって、といった相談を担当保育士や担当教員がよく受けるようになるものもこの頃である。

子どもの「ウン」をどのようにとらえるかは、親によって異なる。特に育児不安の高い

親は、子どもの「ウン」を「ウン」であることより確信をもってとらえている可能性がある（菊野、2013）。育児不安とは育児に対する否定的な感情のことであり、「育児に自信が持てない」といった、育児への心配、不適合感や、「子どものことがかわいいと思えない」といった子どもへのネガティブな感情や攻撃・衝動性のことをいう（川井ほか、2000）。子どもの「ウン」をより確信して捉えることは、子どもに対するネガティブな感情を高めるため、より育児不安を高めると考えられる。育児不安が高まれば、子どもの「ウン」にまた敏感になるといった、悪循環も想定される。育児不安を低減させるためには、不安感を低減する介入のみならず、子どものことばを正しく理解することも重要であると考えられる。そこで子どものつく「ウン」について、これまでの研究を諦観したい。

3歳児がつく「ウン」

子どもが嘘をつくかどうかを検討する方法として、誘惑抵抗実験というパラダイムがある。具体的には、部屋に子どもにとって魅力的なおもちゃを置いておき、子どもを連れてくる。実験者は子どもに、おもちゃを触らないようにと指示して一人残して部屋を出る。その間の子ども様子を観察し、子どもがおもちゃに触るかどうかを確認する。一定時間後実験者は部屋に戻り、子どもにおもちゃを

触ったかどうかを尋ねる。

Lewisら（1989）は3歳を対象に、誘惑抵抗実験を用いて子どもがいつから嘘をつけるようになるのかを検討した。その結果、おもちゃを触った3歳児の38%がおもちゃを触っていないと真実とは異なる回答をしていた。しかしこれは、3歳児が嘘をついたのではなく、「触ってはいけない」ということが理解できていない、もしくは自分の「触った」という行動を覚えていないためではないか、という疑問が残る。そこで、Polak and Harris（1999）は3歳児と5歳児に対して「触ってはいけない」という先ほどと同じような状況に加えて、「触ってもいいよ」とおもちゃに触ることを許可する状況を与え、その後おもちゃに触ったかどうかという質問にどのように答えるのかについて検討した。その結果、3歳は触ってはだめといわれたときにも触っていいよといわれたときにも触っていないと答える傾向が、5歳児よりも高かった。つまり、3歳児の「ウン」は嘘ではないということになる。

3歳児はなぜ「ウン」をつくるのか

しかし前述したように、子どもは3歳になると現実とは異なる「ウン」をつくるようになる。なぜこのような「ウン」をつくるのだろうか。1つの理由に、現実と想像を区別していないことが挙げられる。

Golomb and Galasso(1995)は、子どもの現実と想像の区別について検討するため、次のような実験を行った。実験者はある部屋で子どもに空の箱を見せ、箱には何も入っていないことを確認した後、箱にうさぎが入っているという想像上の設定をする。その後実験者が部屋を空けている際に子どもがどのような行動をとるのかをビデオで撮影した。すると3歳児は、あたかも箱にうさぎが入っているかのような行動をとる。たとえば、箱をなでたり箱の中身をそっと覗いたりする。一方、箱に何か入っているという設定をしなければ、3歳児は箱に対してそのような行動は見せない。つまり、箱に興味があるからという理由ではなく、その中に想像したものがあたかも現実にあるような行動をとっている。その後実験者が部屋に戻り、箱の中に何か入っているかと聞くと、何も入っていないと正確に答えることができる。

つまり、3歳児は現実と想像というものをそれぞれ理解はしているものの、それを区別することは難しいということがわかる。想像したことがあたかも現実でも起こっているかのように考えてしまうのである。このような箱に対する行動は、5歳児には見られないことから、5歳になれば現実と想像の区別が可能になると考えられる。

3歳児の「ウソ」からわかること —想像力の発達—

このように、3歳児は現実と想像を区別することが難しい。これが、3歳児の「ウソ」の原因の1つであると考えられる。たとえば、友だちが見てきたことを先生に得意げに話しているのを見て、自分も見たいような気になったり、できたらいいのに、と想像していることが自分の中では現実となり、できる、ということになってしまう。

確かに3歳児が言っていることは大人からしてみれば「嘘」である。しかし、想像力が豊かでなければこのようなことは出てこない。実際2歳児では3歳児のような「ウソ」は見られない。つまり3歳児の「ウソ」は想

像力の芽生えの証拠であると考えられる。

5歳児の「ウソ」からわかること —人の気持ちの理解の発達—

3歳児の「ウソ」が嘘とは言えない理由はほかにもある。そのためにはまず、大人のいう嘘を知る必要がある。嘘とは、他者に真実とは異なる情報を意図的に与えることを言う(箱田・仁平、2006)。たとえば、相手に缶に入っているクッキーを食べられないようにするために、缶の中には何も入っていないという情報を与えることは、嘘をつくということになる。このような嘘をつくためには、人の気持ちを理解し、そのような気持ちがある人の行動にどのように影響を与えるかを理解する必要がある。

この力のことを心の理論という。心の理論とは、他者の心的状態の理解や、心的状態から行動を予測・説明する上で必要な知識のことである(Wellman, Cross, & Watson, 2001)。心の理論が獲得されるのは5、6歳頃からであり(Naito, Komatsu, & Fuke, 1994)、心の理論が獲得されると人の気持ちを考える必要のある行動、たとえば説得なども可能になる(佐藤、2010)。つまり、5歳になると人の気持ちがわかるようになり相手の行動を推測できるようになるため、5歳児の「ウソ」は嘘に近いものであると考えられる。ただし5歳児の嘘も大人と同じであるとは言えない未熟なもので、たとえば嘘を見破られないように付き続けることは難しいことが示されている(Talwar & Lee, 2002)。

いずれにしろ、5歳児は先ほど挙げたような

多くの能力を駆使しながら、大人とほぼ同等に人の心を理解し利用できていることになる。

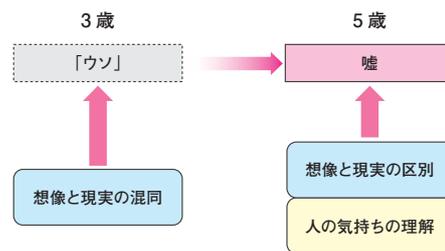


Figure.1 子どもの「ウソ」の発達と関連要因のまとめ

まとめ

本稿では、子どもの心を知ることばとして「ウソ」を取り上げた。3歳児の「ウソ」は人を意図的に騙すものではなく、現実と想像を区別できないといった3歳児の認知能力を表している。それが5歳児になると、大人により近い意図的な嘘に発達する。3歳児の「ウソ」は豊かな想像力の表れであり、5歳児の「ウソ」は認知能力、特に他者の気持ちを理解する能力の顕著な発達の表れであるといえる(Figure. 1)。

子どものことばは子どもの発達を映す鏡であり、子どもを理解する上で重要な手がかりである。しかし本稿で議論した子どもの「ウソ」の発達の知見は、大人の価値観のみから子どものことばを決めつけて理解することの危険性を示しているともいえるだろう。

主要引用文献

Golomb, C., & Galasso, L.(1995). Make believe and reality: Explorations of the imaginary realm. *Developmental Psychology, 31*, 800-810.
箱田裕司・仁平義明(2006). 嘘とだましの心理学—戦略的なだましからあたたかい嘘まで。有斐閣。
菊野春雄。(2012). 母親の育児不安は嘘の認識を妨げるのか、それとも促進するのか。大阪樟蔭女子大学研究紀要, 2, 43-45.
Lewis, M., Stanger, C., & Sullivan, M. W.(1989). Deception in 3-year-olds. *Developmental psychology, 25*, 439-443.
Polak, A., & Harris, P. L.(1999). Deception by young children following noncompliance. *Developmental psychology, 35*, 561-568.
佐藤友美。(2010). 就学前児における他者を考慮した説得の発達。心理学研究, 81, 471-477.
Talwar, V., & Lee, K.(2002). Development of lying to conceal a transgression: Children's control of expressive behaviour during verbal deception. *International Journal of Behavioral Development, 26*, 436-444.



Profile

国際人間学研究科心理学専攻 准教授

吉住 隆弘 (YOSHIZUMI Takahiro)

福岡県北九州市出身。2008年名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程修了。博士(心理学)。研究テーマは、児童・青年期の心の問題、臨床心理学的地域援助、貧困者・家庭への支援。zumie@isc.chubu.ac.jp



経済的困難世帯の子どもを 対象とした学習支援への取り組み



問題の背景

2008年秋のリーマンショック以降、生活保護を申請する世帯数が急増し、200万人を既に超えたことが大きく新聞等で話題となった。このような不況はその世帯に含まれる子どもにも大きな影響を与えていると考えられ、相対的貧困率（所得中央値の50%以下の所得しか得ていない人の割合。直近の2009年は15.7%）は、わが国の6.3人に一人の子どもが相対的に貧困であることを示している。

このような不況は、その世帯に含まれる子どもにも大きな影響を与えている。特に顕著なのが教育現場であり、進路の問題においては、被保護世帯の高校進学率は一般世帯と大きな開きがある。低学歴であることは、将来的に不安定雇用につながる可能性が高く、その結果本人も経済的問題を抱えてしまうといった、貧困の連鎖の要因となりうる。実際、大阪府堺市の調査によれば、生活保護を受給している世帯主が子ども期に育った家族も生活保護受給していたとする割合が25.1%であり、また72.6%が中学卒または高校中退であった（道中、2009）。これらのことは、貧困の再生産の防止のためには、教育に対する支援が重要な要素のひとつとなることを示している。

この不利益の連鎖の主要因の一つに教育機会の制限があると位置づけ、予防的な観点か

らアプローチするのが、経済的困難世帯を対象とした学習支援である。1987年から続く東京都江戸川区の「江戸川中3勉強会」がその始まりとされており、東京都江戸川区のケースワーカーが、各家庭を訪問しながら個人的に子どもの学習面の指導を行ったことから生まれた活動である。その後、2005年に厚生労働省が実施を定めた自立支援プログラム策定実施推進事業、2009年からの子どもの健全育成支援事業、そして2011年からの生活保護受給者の社会的な居場所づくり支援事業と、制度面での拡充が契機となり、学習支援を行う自治体の数は年度を追うごとに増加している。

中部大学生による学習支援 —「学習教室きみいろ」—

2011年当時、既に全国に広がりつつあった学習支援であったが、愛知県内で学習支援を行っている自治体は無かった。まずは近隣自治体の役所に対し協働運営について持ちかけてみたが、「いい活動ですね」や「応援し



写真1 学生手作りによる看板

ます」と一定の関心は持っていただいたものの積極的な声が聞かれることはなかった。唯一賛同してくれたのが高蔵寺で活動するNPO団体であり、彼らの「地域支援として必要な活動です。いっしょにやりましょう」との声が大きな励みとなり、その後の後押しとなった。かくして2011年12月より、中部大学生を主体とした学習支援「学習教室きみいろ」は春日井市高蔵寺にてスタートした。「きみいろ」という名前は、「子どもたちそれぞれの個性が輝く場所になって欲しい」と、活動の立ち上げに携わった学生スタッフの一人が名づけたものである。利用者や見学に来られた方から、「きみいろさん」と親しみを込めて呼ばれることも多い。また活動時に掲げる看板も学生によるハンドメイドであり（写真1）、名前とともに学生の若いセンスが活かされた作品になっていると思う。

きみいろの主たる利用者は、家庭の経済的問題のために塾等の補助学習を受けることができている中学生である。個人情報保護の問題もあり、支援対象者に直接声を届けることが難しいため、年に数回チラシ配りを学生スタッフが行うことで利用者の獲得に努めている（写真2）。自分達の実際の足で利用者を募ることで、申し込みがあったときの喜びは格別なものとなり、また地域が置かれている状況をミクロな視点で考える機会ともなるため、現在の方法がよいと考えている。ただ最近では、春日井市の広報紙を見たという方や、



写真2 チラシ配りの様子

市役所から紹介されたという方も出てきており、活動を始めて二年弱、少しずつ地域に浸透しつつあることを感じている。

現在のきみいろの利用登録数は、生活保護世帯、母子世帯、非正規労働者世帯、在日外国人世帯等の8世帯である。一回の参加者平均数は3.8人であるが、2013年度だけみると4.7人と増加傾向にある。学習内容は、生徒の主体性を育むという意味で、生徒自らが勉強する内容を決めるという方針をとっている。宿題やテストの直しが多いようであるが、中にはポーっとしたまま過ごす生徒もいるため、そういう時は、学生スタッフが雑談をしたり、クイズ形式で課題を出したりするなどして少しでも勉強に向かうような働きかけを行っている(写真3)。また時にお楽しみ会と称して、学生スタッフのアイデアによりイベントをやったり、年度の最後にはお別れ会を開催したりしている。以下に実際に参加している生徒を紹介する。Aくんは、母子世帯のお子さんと、一般の塾は合わないという理由できみいろに参加した。壊れた筆記用具を使い、服装も薄汚れているのが印象的である。性格は明るいだが、学習への動機付けは低く、うつ伏せで過ごすことも多いため、スタッフがクイズ形式でやる気を出すよう働きかけている。母親は、いつもはルーズな子どもが、忘れずに通っていることに驚くが、その一方



写真3 学習の様子

で、学習や日常生活をめぐる親子げんかが絶えないと言う。

学習をサポートする学生はボランティアによる参加である。当初は私のゼミに配属されてくる学生が主であったが、最近は他のゼミやゼミ配属前の学生からも希望が出されるようになった。尋ねてみると「臨床心理士を目指しているが、授業で実際に人と関るわけではないので物足りないと思っていた」との声が多く聞かれる。臨床心理士については、本学には臨床心理士を養成する専門コースを設置した大学院がないこともあり、希望する学生はそれほど多いわけではない。ただ年に2～3名は臨床心理士を目指して他大学院に進学しており、そのような学生がきみいろに参加することは、大学院に進む前の実践教育の場となると考えている。また実際に活動に参加している学生スタッフからは、「一つの社会問題に向き合うことで、他の社会問題も視野に入りやすくなり、社会問題全体を意識するようになった」や「子どもたちとの関わりの中で自分も成長できる。様々な視点から考え、一人一人を理解し受け入れることができたようになった」と、社会問題に関心を持つ契機や、精神的な成長のきっかけともなっているようである。なお貧困問題への社会的な関心と重なり、新聞等のメディア等の取材を受けたり、市議会議員や京都や横浜で同類の活動をしている人の視察を受けたりする機会が増えている。また子どもの貧困問題を扱ったシンポジウムに報告者として声をかけて頂くことも増え、学生スタッフの研鑽の場や学生間の交流の場と位置づけて、学生スタッフに報告者を任せることにしている。

学習支援をどう評価していくか？

活動を継続していくためには、学習支援をどのように評価し、その成果についてアピールしていくことが必要である。まず注目されるのが高校進学率である。公式な文書として報告されているものは少ないが、埼玉県と高知県の取り組みについては、双方とも生活保護世帯全体の進学率89.5%を大きく超える

結果となっている。学習支援は、高校進学率の上昇において一定の役割を果たしていることが分かる。

一方、発達のサポートの視点から、学習支援を評価することも必要と考える。生活保護世帯の子どもは、学校で周辺的な位置に置かれることで家庭がよりどころとなってしまう、その結果、自身の希望よりも、家庭に準拠した進路選択を行ってしまう傾向があるという(林、2012)。一般に、子どもはその発達プロセスにおいて、他者との関係性の中で自己を意味づけ、自分自身の興味関心や将来イメージを広げていく。学習支援には、大学生等、生徒と比較的年齢の近い支援者が多く参加するため、生徒は、支援者との関りの中で自身の将来像をイメージし易く、進路についても考えるきっかけとなり得るのではないだろうか。また家庭の経済的問題を抱える世帯の子どもは、複合的剥奪による、重層的な傷つきを受け続けていることが予想される(岩川、2009)。努力さえも社会階層の影響を受けるとする「希望の格差」(山田、2004)が広まってきている昨今、生徒達の内面の傷つきに配慮しつつ、動機付けや自尊心にフォーカスした、心理的なサポートを行うことが重要であり、その視点からの評価も必要と考えている。

学習支援が展開されてきた背景や経緯、そして個人的な経験から、学習支援は、学力形成と居場所の両機能を果たす必要があると考える。不登校傾向のある生徒が学習支援に休まずに来たり、提出物を出さずに内申点の低い生徒が「ここでは宿題をやって今度は提出する」と誇らしげに話したりする場面に遭遇すると、特にその思いを強くする。学力に偏った視点は、学習支援が持つ潜在的な可能性を喪失させてしまうと考えている。

引用文献

- 林 明子 (2012) 生活保護世帯の子どもたちの生活と進路選択—ライフストーリーに着目して 教育學研究, 79, 13-24.
 岩川直樹 (2009) 子どもの貧困を軸にした社会の編み直し 子どもの貧困白書編集委員会編 子どもの貧困白書 明石書店
 道中 隆 (2009) 生活保護と日本型ワーキングプア—貧困の固定化と世代間継承 ミネルヴァ書房
 山田昌弘 (2004) 希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く 筑摩書房

中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻は、文化的、歴史的基盤にたちながら、国際社会でコミュニケーション能力や関係構築能力が十分発揮できる人材、あるいは人間、社会、地域の本質を把握し、柔軟に行動できる人材を総力を挙げて育成します。



国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/開発ガバナンス論/発展途上国論/国際社会開発論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/観光人類学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/ヨーロッパ社会文化研究特論/アメリカ社会文化研究特論/中東・アフリカ社会文化研究特論/中国・アジア社会文化研究特論/国際比較文明論/地域言語特殊研究

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

国際比較文明論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎(情報収集、メディア・クリエイティビズム)/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承芸術特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通

近代世界表象体系

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/産業地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

-
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
 - 編集者：林 上
 - 発行日：2013年10月18日
 - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
 - 中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
 - 電話：0568-51-4079（直通） ●ファクス：0568-52-1325
 - 電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
 - 国際人間学研究科ホームページアドレス：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/